

平成 24 年 10 月 31 日

財団法人富山第一銀行奨学財団
理事長 金岡 純二 殿

助成研究成果概要報告書

教育機関名：富山大学	助成金額：800 千円	
研究代表者：竹内 潔	所属：人文学部 科	職位：准教授
研究題目：富山の海女・海士文化の実相と保全		

【研究概要】

本研究では、これまで学術的調査がほとんどなされてこなかった富山湾の潜水漁撈の活動と生活文化を対象に、まずその現況を明らかにして、日本の海洋文化研究や富山の地域文化研究に新たな知見を付加する。さらに、富山湾の潜水漁撈文化を日本の他地域と比較し、特徴を抽出して、環日本海文化研究に新たな知見を呈示する。これらの作業に拠って、最終的には、収集した具体的資料にもとづいて、ともすれば実体論から遊離しがちな既存の「里海」論を再考する。

【成果要約】

富山県の富山湾沿岸地域、石川県輪島市海士町・舳倉島、福井県坂井市三国町安島、宮城県石巻市網地島及び北上町において現地調査をおこなった。その結果、得られた知見は以下のとおりである。

1) 潜水漁を生業とする海女・海士は、九州北部から日本海側は新潟まで、太

平洋側は岩手県までの沿岸に広く分布している。潜水漁は身体能力と直接に結びついた生業技術であるので、男性よりも女性の方が生物学的に適応的であることは間違いないが、一方で歴史的には地形的環境と農耕や沖合漁撈などの他の生業との関係によって、近年では人口構成や産業構造を反映して、それぞれの地域において男女のどちらが主として潜水漁に従事するかが決定されてきたと考えられる。

調査地を大別すると、a)石川県輪島市海士町・舳倉島や宮城県石巻市網地島のように農耕適地が無い漁業専門地域で、男性が沿岸漁業に従事して女性のみが潜水漁をおこなっている地域、b)宮城県石巻市北上町のように漁業を主生業とする半農半漁地域で、女性が主として農業を担い、男性が沿岸漁業・養殖業に従事するとともに竿を用いてアワビ漁をおこなう地域、c)福井県坂井市三国町や富山県沿岸地域のようにかつては半農半漁であった地域で、男女ともに漁業または農業に専門的に従事し、女性が夏季に潜水漁を担ってきた地域に大別できる。ただし、近年の富山県沿岸地域や福井県安島では、海女の高齢化や後継者不足によってサラリーマンを辞めた男性などが潜水漁をおこなうようになったという事例もある。文献によれば、女性が農業に従事して男性が漁業のかたわら潜水漁をおこなう地域は神奈川県など太平洋側に分布しており、専門的な漁業地域で男女ともに潜水漁をおこなう地域は東北地方に分布しているが、北陸を中心とする今回の調査ではこれらのタイプの性的分業をおこなって

いる地域はなかった。

宮城県網地島のように比較的に海水温が高く入り江が多いために透明度が低い地域で女性が潜水漁をおこなうのに対して、石川県海士町・舳倉島のように海水温が比較的に低く透明度が高い地域でも女性が潜水漁をおこなっており、今回の調査地に関しては、海水の環境的要因と男女の性的役割分担との間に相関は見られなかった。

2)男性が操縦するボートに乗って漁場まで海女が移動する石川県海士町・舳倉島と男性がボートに乗ったまま竿を用いてアワビ漁をおこなう宮城県北上町を除いて、他の地域では潜水漁に従事する海女・海士は、海岸から自力で泳いで漁場に移動する。このような違いは、1)で指摘した男女の分業形態という社会的要因と沿岸部に底棲動物が棲息する岩礁帯や餌場となる藻場が多く採取のために遠方まで行く必要が無いという環境的要因の双方に拠るものと考えられる。魚津の場合は観察した4日間では、潜水漁者は海岸からおよそ10メートルを越えて移動することは無かった。

3)海女の総数は、1956年には17,611人であったが、1978年の水産庁による調査では9134人、2011年に三重県鳥羽市の海の博物館が実施した調査では全国で2074人と激減している。このような減少傾向は、福井県の安島や宮城県の網地島でも顕著であるが、富山湾沿岸地域では潜水漁の従事者が激減しており、現在では潜水漁はおこなわず、海藻類の採取のみの従事者を含めても磯資

源採取をおこなう者は 50 名を下回っている。魚津の道下地区には 1909 年当時、108 名の海女がいたが、現在、「もぐり」と呼ばれる潜水漁撈に従事しているのは浜師と呼ばれる男性 3 名であり、女性については高齢女性が 1 名、海藻類の採取に携わっているだけである。これに対して、輪島市海士町及び舳倉島では、約 200 名の海女が潜水漁をおこなっており、この 20 年ほどの間、高齢化は進んでいるが、員数に大きな変化はない。富山県の沿岸地域で潜水漁の従事者が激減したのは、輪島市海士町・舳倉島の場合、女性が潜水漁に従事し、男性が沿岸漁業もしくは潜水漁の補助をおこなう役割分担によって、地域コミュニティが存続しえたのに対して、富山県の沿岸地域の場合は、工業都市化などの社会経済的变化のために、潜水漁と農作業の双方に従事して生計を立てる半農半漁の生業複合を維持することが困難になったためと推測される。

4) 調査をおこなった地域の海女の間では、地域ごとに海底の特徴や地点を表す方名が共有されているが、富山県の魚津においても、浜に名称が付けられており、また、海底についても、「ウマノセゴ」(隆起している海底)、「カタガルトコロ」(傾斜地)などの名称がつけられている。しかし、富山県沿岸部では、堤防やテトラポットの設置によって浜の景観が変化したことや潜水漁撈従事者の激減によって、伝統的な方名はほとんど使われなくなっている。なお、福井県安島と石川県海士町・舳倉島の間には、岩礁を表現する「クリ」など、海底地形の方名に共通する語が散見されたが、富山県沿岸地域との間では共通方

名は見いだせなかった。

5) 調査をおこなった地域では、海と関係の深い祭神に対する信仰が見られたが、富山県魚津市の道下地区にも海の女神を祀る神社があり、貝類の収穫が終わる直前の8月下旬に「浜祭り」と呼ばれる祭礼がおこなわれている。海と関わる超自然的存在に対する崇敬は、漁獲が潮の流れなどに左右され、身体の危険を伴う潜水漁の特徴と深く結びついていると考えられる。しかし、魚津では、潜水漁や採藻の従事者が激減したため、祭礼の伝統の継承が困難になっている。

6) 福井県安島では、海女は現在の島根県方面から渡来してきたという伝承があり、石川県海士町・舳倉島では現在の福岡県宗像市鐘崎から渡来してきたという伝承がある。しかし、富山県沿岸地域では渡来伝承を聞くことは無かった。

7) 輪島や富山県の沿岸部では、海水温の上昇に起因すると推測される「磯焼け」と呼ばれる現象が進行しており、餌となる海草類の減少に伴って潜水漁撈の漁獲対象であるアワビなどの底棲生物の個体数が減っている。富山県の黒部市を除く滑川以東の沿岸部、石川県舳倉島、福井県三国町では、漁業協同組合と行政が共同して、毎年数万のアワビの稚貝の放流をおこなっているが、ヒトデやマダコに捕食されるため、10センチ以上の成貝にまで成長する率は数パーセント程度であり、漁獲の回復には到っていない。魚津の場合は、海岸部に設置された堤防やテトラポットが潮の流れを変えて天然岩石の減少を惹起して貝藻類の付着が困難になっていることも放流効果の低さと関係していると推測

される。宮城県北上町では、東日本大震災の際の津波によって、沿岸のアワビが激減したために伝統的なアワビ漁が休止されているが、網地島では海岸部が入り組んだ地形であるために漁場に対する津波の影響が比較的になく、潜水漁は継続されている。

8) 【総括と里海の再考】

潜水漁撈やアワビ漁をおこなっている調査地域では、地域の社会経済的な事情によって男女のいずれか、あるいは双方が従事している。海水や海底の特徴などの環境的要因は漁場までの移動形態に影響を及ぼしていると考えられるが、男女の性的分業に対しては直接的な相関関係は無いと推測される。全体的に潜水漁撈の従事者は減少傾向にあるが、減少率には社会経済的な変化に因る地域差があり、富山県沿岸部では生業形態の劇的な変容のために激減している。

海と関係の深い祭神に対する信仰は潜水漁撈をおこなっている調査地で共通して見られるが、輪島市海士町・舳倉島や福井県安島の間では海底方名に共通語彙があり、ともに日本海流に沿った海民の渡来の伝承があるのに対して、これら2地域と富山県沿岸部との間にはどちらについても共通性が無い。したがって、富山県沿岸の潜水漁撈は、石川県以西の移動海民文化とは関係を持たず、歴史的に半農半漁の定住生業形態から独自に発達してきたものと推測される。しかし、潜水漁撈従事者の激減と高齢化により、生活文化の継承が困難になってきている。

海水温上昇に起因すると考えられる藻類植生の変化のために、潜水漁撈の捕獲対象であるアワビなどの海産資源が減少しており、稚貝放流などの事業も漁獲の回復には到っていない。この点においても、富山県の沿岸部の潜水漁撈文化の存続が危ぶまれる。

最近、「里山」論の影響を受けて、沿岸環境を「里海」と呼んで、潜水漁を伝統的に持続的資源利用の生業形態と称揚する論説が散見される。しかし、実際には、肉体を道具として分布が一様ではない底棲動物を捕獲するために、漁獲が偶然に左右されるという潜水漁の基本的な特性が、結果として海産資源の持続的な利用に繋がってきたと考える方が妥当である。「里山」と呼ばれる人為が介入した二次的な森林や草地と異なり、沿岸海域環境は人間が馴致することが困難な自然であり、海女・海士の生業文化はそのような人間のコントロールが局限される環境の上で、地域の社会経済的要因と絡み合いながら展開されてきたと言えよう。海女・海士文化が海と地域社会の相互関係を反映した地域固有の生業文化であるという点からも、衰退の一途をたどっている富山県沿岸部の潜水漁撈について、沿岸部で建設が続いている複合観光施設と組み合わせて観光資源として活用するなどの方途によって保全することが望ましいと考えられる。

なお、以上の研究成果の一部は、来年度刊行予定の『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』叢書の中の論考「東アジアの海女文化の文化生態学的考

察」で発表する。